ISSN 0919-7931

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報　No. 200, 2024

***VIEW*　展望**

アジア映画の未来を語るプラットフォームの構築／韓 燕麗…2

***INFORMATION*　学会組織活動報告**

研究企画委員会…3　映像表現研究会…3-4　アナログメディア研究会…5-6
アジア映画研究会…7　映像アーカイブ研究会…8　映像人類学研究会…9
映像玩具の科学研究会…10-12　写真研究会…13　関西支部…14
中部支部…15-16　西部支部…17

***REPORT*　報告**

我々は日中映画交流の新たな風を吹かせられるのか？
～日中映画国際シンポジウム「風雨同舟―日中映画交流の過去、現在、そして未来に向かって」を振り返る～／戴周杰…18-20

FROM THE EDITORS

編集後記…20

「Image Arts and Sciences ／日本映像学会報第 200 号」2024 年 5 月 15 日発行
発行人：斉藤綾子　編集担当／総務委員会（安部裕・藤井仁子・加藤哲弘）
日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
e-mail：office@jasias.jp　https://jasias.jp/

日本映像学会

VIEW 展望

アジア映画の未来を語るプラットフォームの構築

韓 燕麗

昨年の8月12日、北京大学の芸術学院で開催された「中、米、仏、日、韓における映画研究：現状と新しいトレンド」というタイトルの5人の対談に参加した。この小文では、アジア映画研究会のメンバーとしてその交流活動について報告し、隣国における映画研究の現状およびそこから得たいくつかの気づきを会員の皆さんと共有したい。

筆者の北京入りは対談前日の11日であった。6日からの一週間は芸術学院の夏期学校が開校され、対談はその夏期学校の閉校式として企画されたものであった。注目すべきは夏期学校の受講者であり、北京大学の院生に限らず、中国の大学で教鞭を取っている若手教員、さらに海外の大学に在学中の映画研究専門の中国人留学生を含め総勢110名が集まった。当初、定員を50名前後と予定していたのに対し世界中から200以上もの申請資料が届き、会場の都合でやむを得ず人数を絞った結果だと伺い驚かされた。海外の大学で映画作りを学び、世界中の映画祭に入選する中国出身の若手監督が多いと近年よく耳にするのだが、制作のみならず映画研究に携わる中国留学生もかなり増えていることを今回の受講者の構成から実感することができた。詳細な集計数字はなかったが、リストをおおよそ見た限りでは、海外から一番参加者が多かったアメリカの各大学（10人前後）をはじめ、イギリス、韓国、ニュージーランド、香港、マカオからもそれぞれ学生が来ていた。夏期学校の期間は北京大学のキャンパス内の宿舎に一週間泊まることができ、参加者同士は授業時間外にも盛んな交流を行ったことが推察された。日本からの学生は一人もいないことを残念に思い、今後は、たとえば今回の会報を通じて情報がより多くの院生に伝わるよう心がけるべきと感じた。

12日の対談は、夏期学校の主要講師としてアメリカから招かれたワシントン大学シアトル校・Yomi Braester教授をはじめ、夏期学校の責任者である北京大学芸術学院・李道新教授、韓国から釜山大学芸術学院・文寛奎教授、フランス映画専門である北京大学・李洋教授、そして日本から筆者の5人で行った。中・米・日・韓4カ国からのメンバーで中国、アメリカ、フランス、日本、韓国の5カ国における映画研究の現状と将来の発展トレンドについて語り合うという壮大な企画であったことから、話がまとまらないことが少々心配であったが、中国トップレベルの映画学術誌『当代電影』の編集者であり、北京大学で映画史を専攻し博士号を取得された檀秋文氏が司会を務め、段取りの良い進行のおかげで、短時間でも充実した時間を過ごすことができた。

筆者がはじめに、企画の段階で拝命した「日本における映画研究の最新状況についての紹介」として、日本の主要な映画研究関連学会の設立年や特徴などを説明した上、一番歴史の長い当会の2023年度第49回全国大会、とくに韓国総合芸術大学校の金素榮氏による基調講演と関連して映画研究とフェミニズム映画理論について、そして筆者が企画した機関紙『映像学』第110号の巻頭エッセイ「映画と作家論」について自らの考えを交えながら紹介した。会場の反応から、日本の学界についての情報が不足しているためか非常に興味を持っていることを認識した。終了後に多くの受講者に囲まれ、30人ほどからWeChatの「友達追加」の申し込みを頂戴した。

5人の発言が一通り終わった後、各国における中国映画研究の現状に焦点を当てた対談がさらに続いた。この小文ですべての発言内容をまとめるのは難しいので、特に印象的だったYomi Braester教授の最近の研究について紹介する。Braester教授は、アメリカにおける中国映画研究の代表的存在であり、学術誌Journal of Chinese Cinemasの編集長として知られている。彼の代表作である*Painting the City Red: Chinese Cinema and the Urban Contract*（デューク大学出版局、2010年）では、1950年代以降の100本以上の中国映画や戯曲を取り上げ、 制作状況に関する豊富なアーカイブ資料や関係者へのインタビューを交えて論じている。十数年が経った現在、彼はニューメディアと都市空間の関係に興味を持ち、今回の夏期学校ではShards of Space and Time: New Media Goes to Townというタイトルでシリーズ講義を行った。その最初の講義では、「ニューメディアは『映画的』か?」（Is new media “Cinematic”?）という問いかけを行い、デジタル時代におけるニューメディアに対する解読を以前のメディアと結びつけながら理論を洗練させようとすることが、最近のアメリカにおける映像・映画研究のトレンドの一つであると紹介された。

北京大学芸術学院から発表された今回の対談についての総括は、フォーマルで硬い文章であったが、基本的なところが賛同できると感じたため、以下で一部をそのまま引用する。「国際的な交流と学術協力を促進し、映画研究の深化と発展に新たな活力と力を注入することを目的とする5人の教授による対談は、異なる文化背景での映画研究領域の多様性と共通性を探るのに役立ち、新たな学術交流の可能性を探求することができた。近年、対面での国際的な学術対話は非常に貴重であり、今回の5人の著名な教授たちの対話は間違いなく貴重なものであった。教授たちの素晴らしい説明と学生たちとの熱烈な対話が相まって、今回の夏期学校は多彩で豊かな学術交流の祭典を創り出した」。

一方で、心配する要素もあった。たとえば、一部の講義がbilibiliを通じてインターネットでライブ中継されたと聞いたので、筆者は中国のインディペンデント映画に関する日本の研究を紹介する前に、ライブ中継が行われていないかと確認することが必要であった。そして北京大学の先生方に迷惑をかけないよう慎重に言葉を選んで発言した。筆者自身が勤務している東京大学で、このような規模のイベントを行う財力や人力を集積せねばならないと思いつつ、アジア映画の未来について自由に議論できるプラットフォームへの探求はまだ途中であり、私たちが負うべきその構築の責務を改めて感じた。

（かん えんれい／東京大学）

対談終了後の集合写真

研究企画委員会

伊津野 知多

第50回大会発表申込について、2月20日付で理事会から、研究発表46件、作品発表9件の予備審査結果を3月13日までに報告するよう依頼を受け、その審査を行った。3月10日10:00-12：00、ZOOMにて研究企画委員会を開催し、審査結果の集約・判定をおこなった。審査基準と審査方法は、2022年12月理事会および2023年12月理事会で決定された以下の通り。

【審査基準】

・発表概要の字数は，800字以上1,000字未満であること。画像等を挿入する場合は，600字以上800字未満であること。

・映像に関する発表内容であること。

・学会にふさわしい発表内容であること。

・日本語の形式も審査の対象になること。

【審査方法】

各委員が、○（問題なし）、△（要検討）、×（不適当）のいずれかで採点し、委員会で集約・判定。

予備審査結果は、以下(1)から(8)の分類・件数となった。＊は各判定基準。

(1)「採択」：研究発表9件

＊特にコメントもなく、委員全員「○」をしているもの。

(2)「コメント付採択」：研究発表20件／作品発表４件

＊委員全員「○」だがコメントがある。あるいは、委員の過半数未満（今期は1～2名）の「△」があるもの。

(3)「条件付採択」（条件は2種:①期日までの入会手続き・会費納入／②理事会の所見をふまえた概要の再提出）

＊①は新入会員。②は委員の過半数（今期は3名）以上の「△」、あるいは1名以上の「×」があるが、委員会での議論の結果、概要を再提出すれば採択してよいと判断したもの。

・「条件付①②」：研究発表1件

・「条件付②」：研究発表8件／作品発表2件

(4)「条件付①・コメント付採択」：研究発表3件

(5)「再審査」：研究発表4件／作品発表1件

＊委員の過半数（今期は3名）以上の「△」、あるいは1名以上の「×」があるもの。

(6)「条件付①・再審査」：研究発表1件／作品発表１件

(7)「不採択」：0件

(8)「その他」申込部門が異なる可能性があるエントリー：1件

これらのうち、「コメント付採択」、「条件付採択」②については概要の再提出を4月10日まで受け付けることとする。

上記について、3月17日理事会に内申し、同日の理事会審議にて承認された。なお「再審査」については、概要の再提出期限を3月28日とし、4月5日の結果通知までの間に、研究企画委員会による再審査結果の集約・判定を経て、理事会での審議をおこなうことが決定された。

以上

（いづの ちた／研究企画委員会委員長、日本映画大学）

映像表現研究会

奥野 邦利

第17回となった映像表現研究会主催の「インターリンク：学生映像作品展(ISMIE)2023」は、2022年度10校に減じた参加校も16校が集まりました。実施の面ではコロナ禍以降、オンラインのみの開催が続いていましたが、2023年度より名古屋会場での対面開催が実現しています。東京会場としては、引き続きWEBページでの作品公開とオンラインでの公開研究会を行いました。各会場の報告は以下に記します。

【参加校一覧】

愛知県立芸術大学

イメージフォーラム映像研究所

大阪芸術大学

大阪電気通信大学

九州産業大学芸術学部芸術表現学科メディア芸術専攻

京都精華大学芸術学部＆芸術研究科（映像）

尚美学園大学 芸術情報学部 情報表現学科

情報科学芸術大学院大学［IAMAS］

椙山女学園大学文化情報学部

成安造形大学　情報デザイン領域

宝塚大学　東京メディア芸術学部

玉川大学芸術学部

東京工芸大学芸術学部

名古屋学芸大学 メディア造形学部 / 大学院メディア造形研究科【幹事校】

日本大学芸術学部 / 大学院芸術学研究科【幹事校】

文教大学情報学部メディア表現学科

＜名古屋会場＞［日程］2023年12月2(土), 3日(日)

［会場］愛知芸術文化センター｜アートスペースA

2023年12月2(土)と3日(日)に、愛知芸術文化センター（アートスペースA）にて、コロナ禍以降3年ぶりとなるオンサイトでの上映会「インターリンク：学生映像作品展(ISMIE)2023」を開催しました。ムービング・イメージ・フェスティバル(MIF)2023内の主要プログラムの一つとして実施し、来場者数は2日間で179名でした。

当日は、出品者やその関係の学生に留まらず、一般の方も訪れ、幅広い年齢層の方々に観ていただくことができました。各プログラムの上映後には、会場にお越しいただいた出品者の方（尚美学園大学など、遠方からお越しくださった出品者の方もおりました）に、作品紹介を行なっていただきました。上映会後に、会場に残り、作者へ直接質問や感想を述べる方もいて、コロナ禍以降しばらく見ることのできなかった、実会場ならではの作者と鑑賞者の交流の様子を見ることができたのは、嬉しいことでした。また、2日目の全プログラム終了後、参加校教員による公開トークを実施し、上映作品に関する所感や、昨今の学生作品の傾向等について意見を交わしました。

［参加者一覧］
司会進行：伏木啓（名古屋学芸大学）
パネラー：青山太郎（名古屋文理大学）、伊奈新祐（京都精華大学）、越後谷卓司（愛知県美術館）、奥野邦利（日本大学）、齋藤正和（名古屋学芸大学 ）、 世古哲也（名古屋工学院専門学校）、前田真二郎（情報科学芸術大学院大学）、宮下十有（椙山女学園大学）
敬称略

文責：伏木啓
（ふしき けい／映像表現研究会、名古屋学芸大学）

＜東京会場＞［学生作品WEBページ公開］2023年12月10日(日) ～
2024年1月17日(水)
［オンライン公開研究会］2024年1月7日(日)

2024年1月7日（10:00～12:00）に研究会事務局である東京・日本大学がホストとなってZoomでの開催となりました。第17回も全国の参加校推薦教員17名のほか、卒業生を含む作者14名が集まり意見交換ができたことは、改めてオンライン開催のメリットを感じる会となりました。

公開研究会の様子としては、参加する推薦教員から自校の作品解説と他校で注目した作品について講評を行い、時には参加している他校の作者へ質問が飛ぶこともありました。また、単に作品の評価だけではなく、学年進行による課題や技術的な各校の取り組みが見えたところは非常に興味深かったです。

昨年も報告したように、実写（カメラ）を使って記録した現実を、様々なコンセプトで再構成するメタ的傾向と表現の多義性は、学生あっても、もしくは学生だからこそ、さまざまな文脈で展開していることが確認できました。

なお、学生作品のWEBページ公開（参加全作品）は上記の期間で行いましたが、文末のURLにて過去作品も含めて一部視聴できますので是非ご覧ください。学会HPの映像表現研究会ページにもリンクがあります。

［参加者一覧］
司会進行：奥野邦利（日本大学）
パネラー：池田泰教（愛知県立芸術大学）、村山匡一郎、門脇健路（イメージフォーラム映像研究所）、大橋勝（大阪芸術大学）、由良泰人（大阪電気通信大学）、黒岩 俊哉（九州産業大学）、伊奈新祐（京都精華大学）、川口肇（尚美学園大学）、前田真二郎（情報科学芸術大学院大学［IAMAS］）、宮下十有（椙山女学園大学）、櫻井宏哉（成安造形大学）、芦谷耕平（宝塚大学）、宮崎淳（玉川大学）、李容旭（東京工芸大学）、伏木啓（名古屋学芸大学）、野村建太（日本大学）
敬称略

すでに年度も改っていますが、映像表現研究会としては、制作系の会員の新作を中心にした上映及びそれに伴うシンポジウム開催への呼びかけを始めています。スケジュール調整や会場確保など、皆さんの協力なくしては実現しませんので、ご協力のほどよろしくお願いします。

早いもので伊奈新祐会員より研究会代表を引き継いで 2 年になりますが、上記のことも含めて、参加メンバー及び会員諸氏からの提案など御意見を私宛にお寄せ頂ければ幸いです。

＜ISMIE2023参加作品＞の詳細については、以下を参考にして下さい。
https://sites.google.com/view/ismie2023/
継続公開可能な作品は、以下のYouTubeチャンネルにて公開中です。
https://www.youtube.com/user/ismie2012

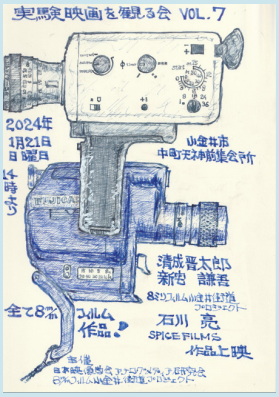
文責：奥野 邦利
（おくの くにとし／映像表現研究会代表、日本大学）

アナログメディア研究会

太田 曜

アナログメディア研究会 活動報告 実験映画を観る会　VOL-7

実験映画を観る会　VOL-7
8ミリフィルム小金井街道プロジェクト清成晋太郎＆新宅謙吾、Spice Films石川亮 作品特集上映



上映告知のポスター

上映の様子

日時：2024年1月21日　日曜日　14時から上映
場所：小金井市中町天神前集会所　〒184-0012 東京都小金井市中町1丁目7-7

実験映画を観る会は、フィルムで制作された実験映画をフィルムで上映することをコンセプトに、これまで6回行ってきた。第7回目は、映像作家, Spice Films主宰 石川亮 ＆ 8ミリフィルム小金井街道プロジェクトの清成晋太郎、新宅謙吾作品の上映。全て８mmフィルムで作られた作品で、8ミリフィルム映写機で上映。上映と作家による解説、清成晋太郎、新宅謙吾、石川亮とのトーク＆質疑応答が行われた。

上映作品

【新宅 謙吾】8作品　23分
●芝生のニコル 2009年　3分30秒　2 Tracks　Single-8
●多摩川のニコル 2012年3月　3分　silent　Single-8
● I Have A Pen 2009年12月　2分　Single-8
●Park 4 Nicole 2014年　2分30秒　24fps　2 Tracks　Single-8
● 5 つのめくばせ 2007年春　3分　silent　Single-8
●Soundless Bound 2007年　1分47秒　silent　Single-8
●Asphalt River 2007年　3分　Single-8
●Sound Out 2012年11月　2分50秒　Single-8　音あり

プロフィール 新宅 謙吾 1974年東京生れ。小金井市在住。 1993年、中央大学で映画研究会に所属したが、一本も制作せず。 2000年、東京都写真美術館で山崎幹夫監督のフィルムワークショップに参加。ヤフオク!で8ミリカメラなどを物色しはじめる。 2007年、小金井市公民館で水由章、太田曜によるフィルム講座に参加。フジカZ450を手に入れ、2013年のフジフイルムの柴崎工場の現像が終わるまで、断続的に撮り続ける。主要モチーフは、息子。ほとんどコマ撮りで、スプライサーによる編集が好物。

【清成晋太郎】5作品＋パフォーマンス 24分＋10～15分ぐらい
●新しい夜（2011 / 3分 / single / サイレント ）
●鬼火（2011 / ８分 / single / サイレント）
●みえない戦争（2012 / 5分 / single / サイレント）
●のがれゆくこころ（2012 / 5分 / single / サイレント）
●WAR2（2018 / 3分 / super / サイレント）
●＋フィルム作品上映と映写機演奏パフォーマンス（10～15分ぐらい）

プロフィール　清成晋太郎　小金井で行われた8mmフィルムワークショップへの参加をきっかけに、2007年より主に多重露光を使って8mmフィルムでホームムービー作成を開始。ロックバンドSekifuに参加中。

【石川亮】10作品 36分
●Radetzky-Marsch（2011 / 3分 / single8 / サウンドマグネ）
●on the shore（2011 / 3分 / single8 / サウンドマグネ）
●Under current（2011 / 5分 / single8 / サウンド）
●Drift（2012 / 4分 / single8 / サウンド）
●GROW（2013 / 5分 / single8 / サウンド）
●春光呪詛 （2015 / 5分 / super8 / サウンド）
●夜道に坐る （2018/ 3分 / single8 / サウンド）
●Doors（2019/ 3分 / single8 / サウンド）
●Signify（2019 / 5分 / single8 / サウンド）

プロフィール　石川亮 映像作家、フィルム技術者 新宿ミラノ座で映写、東京国立近代美術館フィルムセンターで小型映画の調査及び映写を担当。東京国立近代美術館「Re:play 1972/2015-「映像表現 '72」展で8ミリフィルムの複製・現像を担当。 8ミリフィルム作品の上映企画「!8-exclamation8」や、自家現像ワークショップを企画・運営しているSpice Films主宰。ドイツ、アメリカ、韓国など国内外で上映多数。近年は東京都美術館や東京都写真美術館などで、インスタレーション作品の展示をおこなっている。 http://spicefilm.blog.fc2.com

主催：
日本映像学会 アナログメディア研究会
https://www.facebook.com/analogmedia
https://twitter.com/analogmedia2022
８ミリフィルム小金井街道プロジェクト
http://shink-tank.cocolog-nifty.com/perforation/
https://twitter.com/8mmfkkp

トーク：左から、新宅、石川、清成

トークの様子

研究会が不定期で小金井市の集会所を会場にして行っている『実験映画を観る会』の7回目は、共催団体8ミリフィルム小金井街道プロジェクトの新宅 謙吾、清成晋太郎と研究会のメンバーでもあり、またSpice Filmsを主宰する石川亮の8ミリフィルム作品の上映だった。清成晋太郎の新作ライブパフォーマンス8ミリフィルム作品も上映された。

実験映画を観る会はフィルムで制作された実験映画作品をフィルムで上映して、作家の解説などと共に鑑賞する会として継続している。分かりにくいと言われることも多い実験映画を、作家が解説して、オリジナルのフォーマットで上映、鑑賞するのは意義があることだと考えている。フィルムで作られた映画のデジタル化が急速に進んでいる中で、フィルム映画作品をフィルムで上映、鑑賞する機会は急激に減少している。とりわけ8ミリフィルムに関しては、日本の独自フォーマットだったシングル８フィルムはすでにその生産を終了し、新たな作品をシングル８フィルムで作るのは基本的に出来ない。機材もほとんど全て中古でしか入手出来ないので、上映をオリジナルの8ミリフィルムで行うのには多大な困難が伴う。

デジタル化は確かに鑑賞の利便性などを高めるが、フィルムで作られた映画は必ずしもデジタルで鑑賞されることを前提としてできている訳ではない。フィルム作品をフィルムで鑑賞することは利便性とはかけ離れた事だが、重要な意義があると考えている。そもそも表現のメディアには、そのメディアにしか出来ない表現がある。だから同じような物を作るのにもいろいろなメディアが存在している。絵画において、例えば同じ絵を描くに油絵の具や水彩絵の具、アクリル絵の具、あるいはCG など、どれもその表現のあり方は一様ではない。画家は表現とメディアが一体のものだということを知った上でメディアを選ぶ。映画の場合事情は若干異なる。映画産業が存在する中で実験映画は主に個人の表現として、映画産業の技術を利用しながら制作されてきた経緯がある。映画産業はその技術を経済の合理主義で発展、進展させてきたので、現在ではほぼ世界中で産業的に製作される映画はデジタルだ。

フィルムでしか出来ない表現があっても、映画製作の経済的合理主義に合致しなければ、監督や撮影監督や観客などの意見は製作に反映されない。そもそも、フィルムで撮影される映画は少なからずあるが、それをフィルムで上映出来る映画館は今ではほとんど存在しない。実験映画は必ずしも経済的合理主義で制作されているのではないので、いまだにフィルムで作られているものも少なくない。そういう中で、8ミリフィルムは今でもフィルムでの映画制作の入り口になっている。8ミリフィルム小金井街道プロジェクトは研究会の太田と水由がかつて小金井市で行った8ミリフィルムで制作するという市民講座がその設立の発端だった。Spice Films主宰石川亮も、研究会メンバーとの少くない関係の中から現在の活動を行っている。出会いの機会は重要だ。

フィルムで制作された実験映画をフィルムで上映することは、フィルムの表現に直接触れてもらう貴重な機会だ。直接会場で、フィルムで上映されている映画を観る以外にフィルムの表現を知る方法は無い。そういうことでは実験映画を観る会は意義がある活動であると考えている。

文責：太田曜
（おおた よう／アナログメディア研究会代表、東京造形大学）

ショートフィルム研究会

林 緑子

企画名　さとうゆか個展「アニメーションの実験－実像と虚像、その物質性」
日　時　2024年2月22日(木) ～2月26日(月) 12-19時
会　場　シアターカフェ（愛知県名古屋市東区）
内　容　上映、素材展示、講演
展示作家　さとうゆか氏(アニメーション作家、育英館大学情報メディア学部助教)
企画者　林緑子(名古屋大学人文学研究科博士)
主　催　日本映像学会ショートフィルム研究会、名古屋大学融合フロンティアフェローシップ事業、シアターカフェ
講演1ゲスト　2月24日(土)15:00-17:00 ALIMO氏（作家、 愛知県立芸術大学准教授）
講演2ゲスト　2月25日(日) 15:00-17:00伊藤仁美氏（映像作家）

本企画は、日本映像学会のショートフィルム研究会、名古屋大学フロンティアフェローシップ事業、シアターカフェによって開催された、さとうゆか個展である。さとうゆか氏の制作している短編アニメーションの持つ実験性と物質性の魅力について、作品上映、作品の素材展示、講演の3つの側面からみせる内容であった。

上映は、さとう氏の学生時代から現在に至るまでの短編アニメーション作品を、版画アニメーションとコマ撮りアニメーションの2プログラムに分けて上映した。制作技法に分けて、時系列の順番で上映することにより、作家の興味関心や制作技法の変遷が伝わるものとなった。展示は、両プログラムのうち学生時代の『R.I.P.』や最新作のステンシルアニメーション『もも』などの版画素材、『YARNimation』や『clojector』などのコマ撮り作品の装置や素材を展示している。いずれも、上映作品と併せて鑑賞することにより、映像内にみられる質感や物質性を理解する上で参考になるものであった。

講演１は、聴き手のALIMO氏の進行により、さとう氏の制作背景やこだわり、コマ撮りアニメーションの魅力について話した。さとう氏の作品は、キャラクターや物語性よりも素材や実験性に注目している点や、学生時代から一貫してコマ撮りアニメーションを中心に制作している点が特徴として挙げられていた。また、指導を受けた教員2名の影響が大きいこと、実写の風景や布や紙、砂糖などの身近な物をモチーフに選ぶ傾向があることも語られた。さとう氏によれば、コマ撮りアニメーションは、実際に手で触って試行錯誤しながら制作できる点と、そこに遊び心を盛り込むことができる点が大きな魅力である。そうしたことから、作品を制作する際の試行錯誤のプロセスを大切にしているそうだ。

講演2は、さとう氏と伊藤仁美氏が、大学時代から現在に至るまでのアニメーション制作や上映会の経験について語った。両氏は、上映会を開催する意義として、アニメーション文化の継承、同世代の交流の場の提供、発表の機会の確保などを挙げている。自発的な活動が、そのような機会を生むことにつながると話した。アニメーション制作を長期にわたって続ける原動力は、作品制作への思い入れや作りたいという欲求の大切さがもとになると述べていた。完成までに集中力と時間がかかる、アニメーション制作プロセスの苦痛と完成時の喜びを反復することも、制作継続の支えになっているとしていた。作品の言語化できない部分について、解説を求められることの苦しさがあることを話しつつも、観客からのフィードバックが新たな気づきをもたらすことの価値を述べた。上映会の楽しみは、実際に会場に赴くことの大切さ、来場者同士の交流、作品鑑賞体験など複合的であることを話していた。

（はやし みどりこ／ショートフィルム研究会代表、
シアターカフェディレクター）

アジア映画研究会

石坂 健治

◉公開イベント「レザ・ジャマリ監督（イラン）マスタークラス」（第 3 期第22回（通算第55回）としてカウント）
日時：2024年２月19日（月）14時～16時30分
会場：日本映画大学新百合ヶ丘キャンパス４階大教室
主催｜日本映画大学、国際交流基金
共催｜日本映像学会アジア映画研究会
協力｜東京国際映画祭
担当：石坂健治（日本映画大学、本学会員）

◎開催趣旨
日本映画大学および国際交流基金との共催で、イランからレザ・ジャマリ監督を招いてマスタークラスを開催した。ジャマリ監督は、長編監督デビュー作『死神の来ない村』で、2019年に東京国際映画祭「国際交流基金アジアセンター特別賞」を受賞。すでに第２作も完成させており、国際的な活躍が期待される新鋭監督である。

◎タイムテーブル
14:00～15:30　上映『死神の来ない村』（2019年／87分／Blu-ray ／日本語字幕付）
15:30～16:30　レザ・ジャマリ監督トークショー

◎監督プロフィール
Reza Jamali ／1978年イラン、アルダビール生まれ。数多くの短編映画を監督し、国内外の映画祭に入選、多数の映画賞に輝いた。『死神の来ない村』で長編監督デビュー。東京国際映画祭2019で国際交流基金アジアセンター特別賞を受賞。今回の日本訪問は同賞の副賞として実現したもの。
◎『死神の来ない村』原題Piremardha nemimirand、英題Old Men Never Die
45年間ひとりの死者も出ない村はいまや老人ばかり。100歳のアスランと仲間たちは、もはや自殺しかないと考え始めるが…。短編で腕を磨いたレザ・ジャマリ、待望の長編デビュー作は寓意に満ちた大人のドラマ。
◎イベント報告
当日は『死神の来ない村』の上映後、当研究会の石坂が聞き手となり、ジャマリ監督に作品の魅力や製作秘話について語っていただいた。通訳は、日本とイランの合作映画を数多くプロデュースし、執筆家・翻訳者としても知られるショーレ・ゴルパリアン氏が務めた。監督は自作やイラン映画の現状について解説し、さらには前日に敬愛する黒澤明監督の墓参りをしたことなど、話題は様々な方向に広がった。質疑応答のコーナーでは学生を含めて活発な質問が寄せられ、その一つ一つに丁寧に答えている姿が印象に残った。当研究会会員、日本映画大学の学生・教員、映画制作者や研究者、イラン映画ファンなど幅広い聴衆60名ほどが参加して盛況のうちに閉会した。

チラシ

レザ・ジャマリ監督

会場全景

（いしざかけんじ／アジア映画研究会代表、日本映画大学）

映像アーカイブ研究会

門林 岳史

映像アーカイブ研究会では2024年1月20日徐昊辰（ジョコウシン）氏による講演「保存から文化交流へ——映画祭とデジタル映画アーカイブの未来」をオンラインで開催した。徐昊辰氏は2020年より上海国際映画祭で日本プログラムのプログラマーを務めており、それ以前から映画ジャーナリストとして日本映画と中国映画の批評や産業分析などを精力的に執筆してきた人物である。

徐氏の講演は、近年における中国の映画市場の現状を確認することから始まった。中国では、2000年代以降の経済の急成長のなか、総人口14億人で1000万人を超える大都市が多数存在する人口規模もあいまって映画市場が拡大しており、2010年代初頭には日本と同規模の2000億円程度の年間興行収入だったところ、近年では北米を追い越して1兆円に到達しようかという勢いで右肩上がりの急成長を遂げている。このことは映画館のスクリーン数にも反映しており、日本ではここ10年間、3,000台で推移しているところ、中国では2012年に13,000程度だったのが2023年には80,000スクリーンを超した。これは北米の二倍程度の規模である。

他方、中国で公開される映画の本数は日本よりもずっと少なく、日本ではおおむね年間1,000本を超すのに対して、中国では500本程度にとどまっている。そのひとつの要因として、スクリーン数が多いがゆえに宣伝費の規模も大きなものになり、アート作品の配給には不利に働く、ということがある。また、国家電影局の許可が必要なこともうひとつの要因であり、公開されないままにとどまっている外国映画も多いという。

国家的な規制や検閲の問題は、中国での映画視聴環境を語るうえで避けて通れない海賊版や字幕組の存在とも関わっている。中国では1990年代後半から2000年代前半に海賊版産業が隆盛し、それに次いで2000年代後半から2010年台前半には字幕組（外国の映像作品に無断で字幕をつけて配信すること）の活動が活発になった。こうした行為は著作権保護の観点から問題ではあるものの、規制により外国映画の公開本数が少ないなか、もっと外国映画を観たいという市場の需要に応えたものではあると徐氏は指摘する。また、大作だけでなくアート作品の海賊版も作られ、観客を育ててきたという側面は見逃せず、事実、ジャ・ジャンクー監督も海賊版に対して比較的寛容な発言をしているという。

他方で、長らく海賊版や字幕組が活躍してきた状況は、見方を変えると中国での映画視聴環境では、テレビやパソコンなど家庭の小さな画面での鑑賞が大きな位置を占めてきたことを意味している。そうした背景のなかで、例えば日本から18年遅れた2019年に中国で公開されて大ヒットになった『千と千尋の神隠し』（宮崎駿監督、2001年）のように、旧作であっても映画館の大きなスクリーンで鑑賞したいという需要は存在している。このことは、徐氏によれば、中国各都市で近年、映画祭開催が活発になっている一因であるという。すなわち、中国国内での海外映画の上映がいまだ一部制限されているなか、映画祭は海外作品を鑑賞する貴重な機会を与えており、それだけでなく2000年代頃に海賊版を通じて古典を知った映画ファンたちからは巨匠たちによる旧作上映に注目が集まっているというのである。例えば2023年に開催された第25回上海国際映画祭では、「巨匠賛辞」というプログラムのなかで謝晋、ペマ・ツェテン、ジャン＝リュック・ゴダール、マイク・リーと並んで伊丹十三作品の特集上映が組まれた。また、『ブレイド』（スティーヴン・ノリントン監督、1998年）、『ブリジッド・ジョーンズの日記』（シャロン・マグワイア監督、2001年）など、いままで中国で公開されていなかった海外映画が上映され、同じく中国本土では初上映となった『悲情城市』（侯孝賢監督、1989年）はチケットが即完売するほどの盛況だったという。

他方では中国の旧作の上映も盛んに行われている。とりわけ、中国各地の映画祭がデジタル・リマスター部門を設立し、旧作の再発見が進んでいることによって、海外展開の新しい可能性が生じているという。例えば上海国際映画祭は2011年よりスイスの時計メーカーであるジャガー・ルクルトとの協力提携で中国クラシック映画の修復企画を進めており、2023年までに16本の作品を修復した。また、中国映画アーカイブはTikTokと火山引撃（中国のIT企業）とのコラボレーションで香港クラシック映画100本4K修復企画を2023年に始動させた。これは火山引撃のAI技術によって修復作業を部分的に自動化し、修復に要する期間を大幅に短縮させる試みである。このように、徐氏の講演はデジタル・アーカイブや修復の領域においても中国の映画産業が活性化していることに話題が及んで閉じられた。

講演後は参加者との活発な質疑応答が交わされた。報告者個人としては、中国では海賊版DVDによる小さな画面での鑑賞の時代を経て、映画館の大きなスクリーンでの鑑賞を熱望する映画ファンが近年増えていることに驚きを覚えた。これは日本を含め多くの文化圏において、とりわけ若年層のあいだでスマートフォンの小さな画面での映画鑑賞がますます一般化していることとは対照的な現象であり、映画鑑賞という近代的経験の歴史的変遷が、文化的背景が異なればここまでダイナミックに異なることに大きな知的刺激を受けた次第である。

（かどばやし たけし／映像アーカイブ研究会、関西大学）

映像人類学研究会

田淵 俊彦

第6回映像人類学研究会を以下の通り開催した。

日時：2024年1月28日（日）14:00～16:00
開催方法：対面およびZoomによるオンラインの同時ハイブリッド開催
場所：桜美林大学東京ひなたやまキャンパス
テーマ(今回の目的)：近年、脚光を浴びているアニメーション・ドキュメンタリーの領域は、ドキュメンタリーの本来の目的とされる「客観的な事実表現」よりも、記憶などの「主観的なイメージ」や記録しえなかった事柄を再構築することで映像化し、「共有する」ことを目的としていると解釈されている。プライバシーの保護のためにインタビュー映像をアニメーションに加工したものや、過去の記憶などの主観的イメージ、あるいはカメラが存在しなかった出来事の目撃談などをアニメーション化したものなど、その手法は多様性に富んでいる。

著名な作品例としては『戦場でワルツを』(イスラエル、2008)、『FLEE フリー』(デンマーク、2021)、『はちみつ色のユン』(フランス・ベルギー・韓国・スイス、2012) などがある。

アニメーション・ドキュメンタリーの特性は、一言でいえば「カメラでは映せない現実に迫る」という点である。同様にドキュメンタリーの創造性に注目するならば、フィクションとの境界線は案外低いものであり、アニメーション・ドキュメンタリーのみならず様々な映像にドキュメンタリー的な要素を見出すことも可能であろう。従来、ドキュメンタリーとアニメーションとは相容れないとみなされてきた中で、アニメーション・ドキュメンタリーという新しい領域はどのような可能性を押しひろげているのだろうか。そのためには、まずドキュメンタリーの概念を再検討する必要がある。本研究会は、ドキュメンタリーの概念を捉え直す契機として、アニメーション・ドキュメンタリーの実作者の講演・対話を通して、多様な映像表現のあり方を展望してみたい。
申込者数：76名　参加者数：50名(うち対面22名、オンライン28名)
講演者：若見ありさ

自身の体験から企画し制作をした出産にまつわるオムニバスドキュメンタリー・アニメーション『Birth-つむぐいのち』(2015)『Birth-おどるいのち』(2017)『Birth-めぐるいのち』(2020)がLos Angeles Documentary Film Festivalベスト監督賞ほか多数受賞。2020年度文化庁映画賞・文化記録大賞受賞の長編ドキュメンタリー映画「プリズン・サークル」（坂上香監督）アニメーション・パートを監督。宮崎県の民話を地元の方にインタビューを行い、語り部さんと共に制作した「ガラッパどんと暮らす村」は映文連アワード2022文部科学大臣賞を受賞するなど高い評価を得ている。
事前視聴作品概要：『Birth-つむぐいのち』(2016年)

本作は出産をテーマにした女性監督による短編アニメーションオムニバス作品である。出産は人間の数だけ異なる体験があり、たとえ医療が進歩しても時には命を落とす可能性もある。いのちの誕生の不思議さ、つながっていくいのち、出産の現実と苦悩、喜びを幅広い世代に伝えていきたいという狙いからアニメーションという手法を採用したという。本作は、3名の異なる体験談をもつ女性に出産体験を語ってもらい、そのひとつずつの物語をアニメーション作家3名がそれぞれの体験談に合わせたアニメーションの技法により映像化し、オムニバス作品『Birth-つむぐいのち』として公開された。若見氏は企画・総合監督をつとめ、そのうちの一エピソード「水の中の妊婦」を監督している。楽器の演奏者やタイトル制作者などのスタッフに多くの女性スタッフが参加しているのも特色となっている。
当日のプログラム：
14時00分～　開会の挨拶、映像研究会のこれまで(第1回～第5回)の活動についての報告
14時15分～　講演者・若見ありさ氏による講演
15時15分～　参加者との意見交換
16時00分過ぎ　終了
総論：

映像人類学研究会はコロナ禍により、これまでオンライン開催を余儀なくされてきた。今回、初めて会場に講演者をお迎えして、対面とオンラインのハイブリッド開催をおこなった。テクニカル面においては、途中音声が途切れるなどのトラブルはあったものの、おおむね会をスムーズに進行できた。
申し込み人数はこれまでの最多の76名。会場での参加者は学生を含む22名と大変盛況であった。オンラインにおいては、北は北海道、南は九州からと日本全国から幅広い参加者を得ることができた。また、上海視覚芸術学院、大連理工大学などの中国からの留学生の参加も多く、アニメーション表現への人気と関心の高さを裏付けた形となった。ドイツ在住のアニメーション作家の参加や代表者の本務先・桜美林大学のゼミ生も多く出席し、学生からの作品に対するコメント、講師に対する質問なども活発におこなわれた。本研究会の大きな目的は「現場で活躍する映像クリエイターを招き、その叡智に耳を傾けること」であり、同時に「次世代の映像クリエイターたちの交流の場であること」であるため、そういった意味でも今回の研究会はとても有意義であった。

講演者の若見氏からは、『Birth-つむぐいのち』の制作にまつわる背景について具体的な話を聞くことができた。とりわけ、制作において「留意した点」や「苦労した点」などといった実際の制作者であるからこそ話せるリアルなエピソードの聞き取りができたことが大きな収穫となった。また「アニメーション・ドキュメンタリー」の「特性」や「可能性」についても、実作者の視点から具体的に解説してもらえるなど、学生を含めた公開研究会にふさわしく多様な層に届く講演会となった。またオンライン参加者のなかからは、「リアル過ぎて実写では見せられないことを表現することができる」というアニメーション・ドキュメンタリーの特性を取り上げて、「医療教育などに活用する可能性もあるのでは？」などといった多彩な観点からの意見交換を展開することができた。

映像研究者からのアンケートの反応も活発であった。以下に例として挙げたい。「アニメーション表現とドキュメンタリーの関係を考えるうえでも、示唆に富んだご講演（研究会）でした」「当事者の視点で『作る』というのは、万人に拓かれた作り手になる道であるということを学ぶことができました」「女性にしか経験できない『出産』という神秘体験を、丁寧な取材で再現されたドキュメンタリー・アニメーションを通して、疑似体験できたことで、生命の尊さを改めて実感しました」。また、学生にとってもとても大きな「学びの場」となったことが以下のコメントから読み取れる。「私はアニメーション・ドキュメンタリーという全く触れたことのないジャンルを作る、若見ありさ先生の気持ちやきっかけなど、知ることができてとても良かったと感じている。(中略)今回先生の話を聞いて、たくさんの「出産」があり、もし自分が出産する時になったらまたこの映像たちを見返したい。そんなとても心に残る講演会だった」「より多くの人に伝えるためのアニメーション・ドキュメンタリーに対して学べました。観客の意見を聞いて、次のシリーズからは新しい視点を入れたことが、子どもから大人まで、女から男までの意図と近くなったと思いました」「アニメーション・ドキュメンタリーというのにとても意義を感じました。学会でもお話にありましたが、撮影、公開できない場所や人、過去の話もアニメーションだと表現することができるのにとても可能性が広がるのを映像を見てお話を聞いてより実感しました」
今後の課題と取組み：
「アニメーション」と「実写」のコラボレーションはこれまで以上に、様々なジャンルでの需要が高まると確信する研究会であった。次回は、さらに「アニメーション・ドキュメンタリー」の研究を進め、映像で人間を描く「映像人類学」の可能性を模索してゆきたい。

（たぶち としひこ／映像人類学研究会代表、桜美林大学）

映像玩具の科学研究会

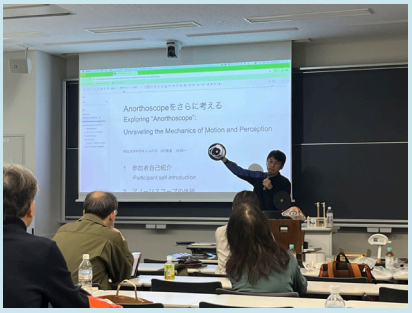
橋本 典久

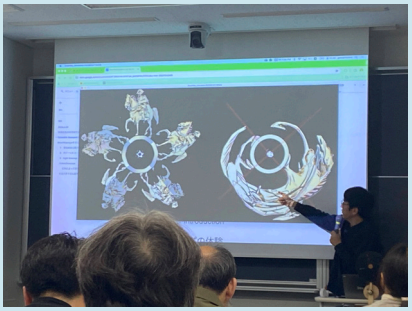
第二回 アノーソスコープを"さらに"考える

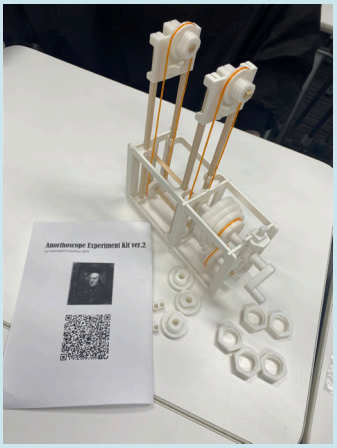
映像玩具の科学研究会は第二回目となる研究会を明治大学で開催した。第一回目の研究会では、J.プラトーが考案したAnorthoscope(1829)の基本的な動作原理などを確認したが、論文などに掲載されている内容にはまだまだ謎が多く残っていたため、それらを実際に検証する会として企画された。今回も少人数のグループに別れ、橋本が新たに開発した実験キットを使用し、実験を繰り返すワークショップとして開催された。

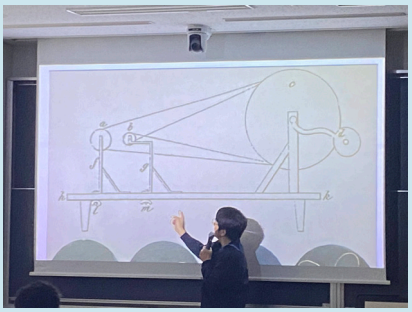
・日時　3月29日　13時から19時
・会場　明治大学中野キャンパス
・参加者　28名 (学会員、専門家、一般、学生)

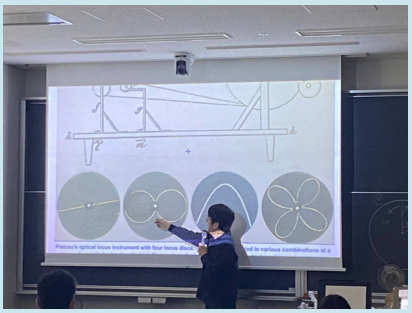
進行
・あいさつ、自己紹介
・アノーソスコープ体験
　オリジナルのアノーソスコープ画像と4本のスリット板を使用し、画像とスリットの回転比を4:1で逆回転させると、歪みが補正された画像が5つ静止して見えることを再度確認した。
・ワークショップ１　Light Drawing
　キットを使用して、プラトーが実験装置と結果を手書きで残している"光のドローイング"を、再現できるか実験を行った。
特に"フライング・ハート"とプラトーが名付けた特殊な形態を再現できるかに期待がかかったが、研究会中では再現することはできなかった。
・ワークショップ２　LOI
　ある図形が書かれた円盤を装置を介して見るとLOIというアルファベットになるという記述をもとに、歯車の比率や回転方向を検証、再現できるか実験を行った。
　こちらもなかなか成功しなかったが、途中で複数の論文中にかかれている描写などをヒントとして提示すると、成功したという報告を聞くことができた。また、TouchDesignerというソフトウェアを使用してシミュレーションを行い、成功させた参加者も現れた。
・(追加)エルキ・フータモ教授によるミニレクチャー
来日中のUCLA教授エルキ・フータモ教授が研究会を見学。岩井俊雄氏による紹介から話は広がり、さながらミニレクチャーに発展した。
・ワークショップ３　古川タク氏制作<驚き盤>(1975)の観察と実験
　橋本が古川タク氏制作<驚き盤>(1975)の調査・修復作業をしているため、許可をいただき会場に持ち込み、内部を紹介。機構と原理を考え、実験キットを使用して再現できるか実験を行った。参加者でもある古川タク氏による開発秘話なども伺うことができた。
　実機を見ながら、絵のコマ数とスリットの数などを検証。回転比を実測、実験キットを使用して検証を行った。時間の都合もあり、どういう条件でアニメーションが起きるかなどの詳細まではわからなかった。
・岩井俊雄氏による研究発表
　岩井俊雄氏による、アノーソスコープを独自に展開させた実験中の作品群のプレゼンテーションがあった。
　アノーソスコープの原理から、さらに何段もの工夫を導き出している実験装置類に歓声が何度も挙がった。
・移動して懇親会(希望者)
エルキ・フータモ氏も交え、活発な議論が交わされた。

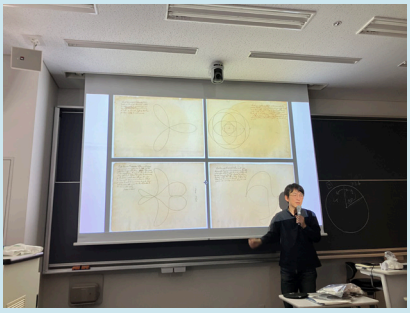


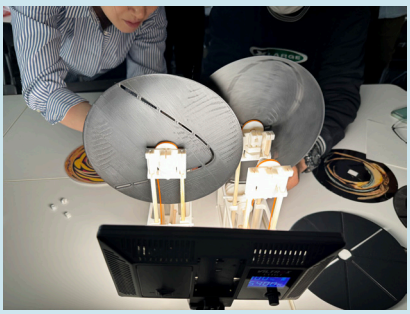


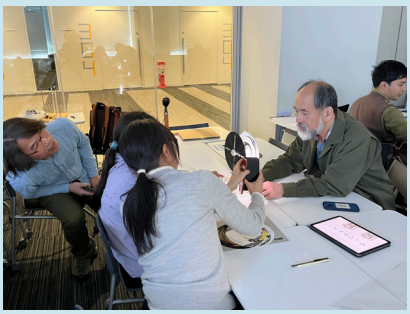


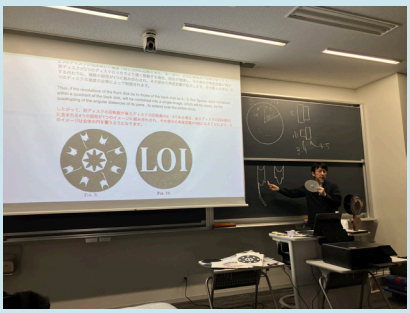


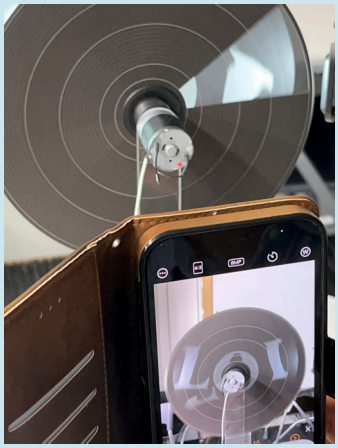


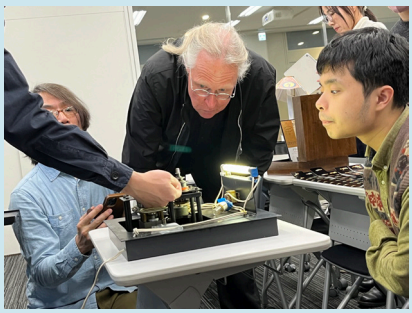







LOI





参加者の感想抜粋

・「LOI」は、二つの円盤を同じ方向に5:4あるいは4:3の比でスリットの円盤の方を早く回転させた時に見えました。スリットは少ない方が見えやすく、120度の位置に二つ、もしくは一つだけのスリットで確認することができました。「光の軌跡」は、花びらのように見えるパターンは8の字に穴の空いた円盤と直線のスリットなどを用いて確認できました。他にも円盤の組み合わせで複雑な軌跡を見ることができましたが、フライングハート（?）ほど複雑な軌跡は確認できませんでした。

・実験で判明したことではないですが、光の観察の実験がとても興味深かった。その時はオラファー・エリアソンの終わりなき研究で描かれた形に近いかなと思っていたのですけれど、帰りに調べていたら、ハーモノグラフによって描かれたリサジュー図形に近い気がした。2つの描かれる光の軌跡が関連し合わないので（スピログラフだと関連する）、形的には近いのだと思う。プラトーが物理学者であったことを考えると、この辺りに着地点があるのは当然かもしれないし、同時に面白く感じた。

・前回に引き続いての参加だったが、プラトーの遺した謎の数と内容に向き合ったワークショップだった。LOIの謎は、まさかこれが見えるはずがないのでは?という文字がTouchDesignerでのシミュレータで表れた時に度肝を抜かされた。エルキフータモさんの参加や古川先生の装置など得るものが多い一日だった。

・今回もアノーソスコープの分析ということで、前回以上の問いはどのくらいあるのかしらと思っていましたが、たくさんあって面白かったですし、二回同じ装置に触ることで分かることや蓄積される知見があり、とても勉強になりました。予期せずエルキ・フータモ先生の登場とレクチャーがあり、感動しました。イメージが動くこと、変容することの純粋な喜びと疑問をを感じつつ探求するという、映像学に深く関係した素晴らしいワークショップでした。

・実際に回転数などを調整する中で見えてくる画像の違いの魅力が、映像の黎明期にも同様に動きへの関心を引きつけていったのだろうと想像を膨らませました。

またエルキ・フータモさんや岩井さんなど光学装置研究の先人達が集う貴重な集まりであったと思います。

・プラトーの実験資料の講義が大変面白くて、さらに資料の図を手掛かりに実践で検証していく作業はとても有意義でした。装置があってこそ、あれだけのことができたと思います。

・初めての参加でした。実際にキットを組み立てて、プラトーが視覚的な効果をどのように得たのかを試していくことが、謎解きをしている感覚でとても面白かったです。視覚装置の実験考古学という感じがしました。また、正解が誰もわからないということが、解いてみたいという好奇心と探究心を掻き立てました。エルキ・フータモさんの講義を見られてとても興奮しました。

・第一回に引き続き、アノーソスコープの第二回目。今回は回転比による見え方の変化だけでなく、スリットの形状の変化もあり、実験の幅が広がることで、理論が煮詰まってもとりあえず手を動かしながら考えられるというのが良かった。前半で得た仮説や検証、経験から行うLOIの再現も、プログラムとしても体験としても非常に面白いものでした。「プラトーの謎を解け」という脱出ゲームかと思うくらいエンターテイメント性も高かったと思います。また古川タクさんの、実働する初期驚き盤や当時のエピソードを聞けたのは大変貴重で岩井さんの研究発表も大変素晴らしかったです。凄い 6 時間でした。

会を終えて

・改良版のキットは、前回よりもトラブルが減少した。

・ライト・ドローイングのフライング・ハートは数学的に軌跡を書いただけというような記述もあり、研究会でも誰も成功しなかったため、実現不可能なものかもしれないと思ったが、後日岩井俊雄氏から成功の連絡があり、私も試行錯誤の結果再現することができた。

・成り行きではあるがエルキ・フータモ教授にミニレクチャーを開催していただくことになり、新たな知見を得ることができた。

・古川タク氏制作の装置驚き盤の機構にはまだまだ謎が残されているので、さらに追求したい。

次回の研究会

歴史をさらに溯り、マイケル・ファラデーの研究を再考することなどを検討している。

最後に

各地の大学などでもアノーソスコープのワークショップを実施したいと考えているので、関心のある方はぜひお声がけください。

橋本典久 hashimoto@zeroworks.jp
（はしもと のりひさ／映像玩具の科学研究会代表、明治大学 ）

写真研究会

佐藤 守弘

写真研究会は、2024年3月24日（日）に同志社大学今出川キャンパス寧静館N31教室にて、第12回研究発表会を行った。

■研究発表1
戸部瑛理（明治大学博物館）
「写真と被災地――志賀理江子「螺旋海岸」（2012）の位置」
■研究発表2
福西恵子（立命館大学）
「帝国主義的・白人至上主義的なイデオロギーの（脱）構築――セントルイス万国博覧会における写真の分析」
■座談会
「「フォトグラフィック・アート――技術と芸術のあいだ」（『美術フォーラム21』第47号特集）を巡って」
討論者： 倉石信乃（明治大学）、 前川修（近畿大学）、 中村史子（大阪中之島美術館）、 橋本一径（早稲田大学）、 甲斐義明（新潟大学）
司会：佐藤守弘（同志社大学）

第一発表者の戸部瑛理氏は、志賀理江子の作品「螺旋海岸」（2012）の位置づけを、志賀の東日本大震災での被災体験との関係に焦点を合わせて考察した。志賀は2東日本大震災に罹災し、津波により宮城県沿岸部、北釜の住居とアトリエを失った。その翌年に、彼女は、震災前に撮影されたイメージも含む「螺旋海岸」を発表することとなる。ただし、彼女は震災について語りはするものの、それが作品そのものとどう関係するかについては明言してこなかった。

戸部氏は、志賀の写真作品には、不可解、あるいは超現実的ともいえる光景が写されている場合も少なくなく、それは、しばしば作者である志賀が「シャーマン」という言葉とともに語られてきたことの要因ともなったと指摘した。そうした言説を批判的に検証した上で、発表者は志賀の写真作品を、東北における民俗写真の系譜――特に民俗学者としても東北を研究していた写真家の内藤正敏の写真――に置いてみる。両者は、被写体の記録であるか創作であるかという相違点がある一方で、人物像の異様な写し方に一定の共通性があり、ともに土着性に対する強い関心が認められると指摘した。さらに「螺旋海岸」の場合には、北釜が津波常襲地であったことにまつわる意識が志賀の作品の背景に見られると指摘した上で、志賀が1940年頃の北釜の「記念写真」を複写・引用した写真作品を分析した。その上で、志賀が被災地における写真家の「当事者性」を意識したかたちで「螺旋海岸」を発表したのではないかと結論づけた。

会場からは、民俗写真との関係性や、コミュニティの内部／外部の問題に関わる問題、さらには本来震災とは無関係に撮影され、発表された写真までもが、なぜ震災との関係のなかで読み解かれるかという問題が提起され、それらをめぐる議論がなされた。

第二発表者の福西恵子氏は、ハワイ大学に提出し、学位を得た博士論文の内容をもとに、セントルイス万博の会場で撮影され、流通した写真を分析することで、写真が単に博覧会における人種的、または帝国主義的なイデオロギーを忠実に反映するにとどまらず、それらを「構築」する側面に注目した。セントルイス万博は、アメリカがルイジアナ州一帯の地域をフランスから買収してから100年が経過したことを記念して1904年に開催された。博覧会を主催した者たちは、当時アメリカで最新の農業、科学、そして建築技術や、諸外国の文化に関する展示を通じて、アメリカにおける文明の優越性、また、アングロサクソン系アメリカ人の人種的優越性をアメリカ内外の一般人に教育することを本博覧会の主な目的の一つとしていたという。

福西氏は、映画研究の理論を応用しながら、写真が当時「リアル」であると考えられていた概念やイデオロギーをどのように構築していったのかを分析した。さらに当時の「レタッチ」などの技術に注目することで、写真がどのようにしてイデオロギー構築に積極的に関わったかについての議論を行ったまた、会場の主な展示スペースで撮影された写真と、「モデル・プレイグラウンド」と呼ばれた会場の保育・託児施設などで撮影された写真を比較・分析することで、写真が当時の人種主義的、そして帝国主義的なイデオロギーを構築しつつも、それらの矛盾点を示したり、更には人種間の流動性を表象するようなかたちで相反する意味を構築する、あるいは脱構築するかのような役割を果たしていたりする可能性が指摘された。

会場からは、取り上げられた写真がどのように流通したのか、それらの意味がどのように読み取られたのか、さらには写真そのものやそのレタッチをどう分析するのかという問題が提示された。

最後に、写真研究会のメンバーが多く論文を執筆した『美術フォーラム21』 第47号（きょうと視覚文化振興財団、2023年6月） の特集「フォトグラフィック・アート――技術と芸術のあいだ」を巡る座談会が行われた。まずは、 特集の編集を担当した司会の佐藤（論文「写真×絵画／工芸／映画――複合メディアとしての彩色／色彩写真」なども執筆）から、特集が出来上がる経緯や編集の意図に関する説明が行われた。 次に「スクリーンショット論――ポストモダン以後の写真／アート／日常」を執筆した前川修氏から、特集全体を概観してそれぞれに解説・コメントがなされた。自らの論文に関しては、コンピュータやスマートフォンで日常的に行われているスクリーンショットを、写真という枠組みで捉えている海外の研究を総括し、日本の読者に伝えるという意図が開陳された。それに続いて倉石信乃氏からは、論文「一九七〇年前後における平敷兼七の写真について」は、平敷の卒業制作の写真に牛腸茂雄や野田哲也などの作品との同時性、同質性を感じたことが執筆の動機となったことが述べられた。そして、特集とは別枠の「現代作家紹介」で「金サジ（Kim Sajik） ――フィクションゆえに本当のこと」を執筆した中村史子氏は、金サジ氏の写真に含まれる虚構性に注目することで、それが真正性を巡る二項対立を乗り越えていく様を評価した。

またリモートで参加していた「最初で最後の写真論?――ロドルフ・テプフェールの「ダゲール板について」（一八四一）をめぐって」を執筆した橋本一径氏からは、青山勝氏による「内燃機関と写真術――ニセフォール・ニエプスの「自動性」の概念について」における「リプロダクション」に関する分析に対する評価が示され、それに対して来場していた青山氏からの応答も聞けた。

さらに倉石氏が提示したTikTokにおける「#ストリートスナップ」というタグに関する問題が提起されて、デジタル・ネットワーク時代における写真の問題に関する刺激的な議論が展開された。最後に「オスカー・G・レイランダーが残したもの――初期芸術写真におけるユーモアと表情」を寄稿した甲斐義明氏（リモート参加）からは、写真というメディア自体の未来に関する危機意識が示され、それに対して倉石氏からは、写真の未来に関して言説の果たす役割が強調されて、盛会のうちに第12回研究発表会は幕を閉じた。

最後に、この2年間代表を務めた佐藤守弘は、2024年3月をもって任を退き、バトンを橋本一径氏に手渡したことを申し添えておきたい。

（さとう もりひろ／写真研究会代表、同志社大学）

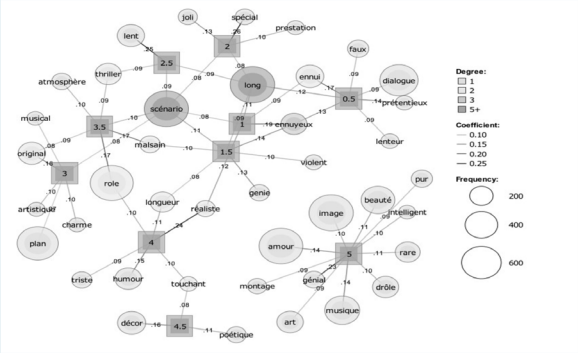
関西支部

大橋 勝

令和5年12月23日（土）、神戸女学院大学を当番校として第98回研究会が開催され、2件の研究発表が行われた。

研究発表1：「芸術的フランス映画」、あるいは「フランスの芸術映画」のデータ分析　―Cahiers du cinéma誌にある46作品を対象にして―
発表者：大阪公立大学 畔堂洋一会員
研究発表2：映画『理性に還る』に見るブリコラージュ的制作方法とオブジェ性
発表者：大阪芸術大学映像学科 大橋勝会員

畔堂会員の発表はデータサイエンスの手法により「芸術的フランス映画」、あるいは「フランスの芸術映画」という語を分析するものであった。フランスの映画批評サイト「AlloCiné」に掲載されている各作品によせられたコメントに対しテキストマイニングを施すことにより、下図に示す単語の共起ネットワークを作成する。これによりテーマの分析を深めていく手掛かりを供給することを目的とする。従来あまり馴染みのなかった情報科学と映像理論・映画批評とを繋ぐ新たな試みであった。



【共起ネットワーク図】抽出語×外部変数（ランク）

大橋会員の発表はマン・レイの映画作品 *Le Retour à la Raison*（理性に還る）について、その制作方法をブリコラージュ的と捉え、表現内容を精査していくものであった。映画『理性に還る』は、ダダの示威行動「髭の生えた心臓の夕べ」（1923）での上映に間に合わすため、極めて短期間で作られており、そのため撮影を必要としないレイヨグラフの技法が全面的に用いられている。「あり合わせのもので繕う」ブリコラージュとダダの無目的な姿勢が本作で融合していることを発表者は指摘する。

Man Ray, *Le Retour à la Raison*, 1923
（画像配置は発表者による）

研究発表後は関西支部総会が開催され、2023年度事業報告、2024年度事業案の提案などが行われ了承された。

令和6年3月9日、大阪大学を当番校として第99回研究会が行われ、2件の研究発表が行われた。

研究発表 1 ：アメリカ映画の中の聖職者像 ―映画『ポセイドン・アドベンチャー』(1972)を中心に―
発表者：朴志元 関西学院大学大学院博士前期課程
研究発表 2 ：ピピロッティ・リストの作品における触覚性
発表者：柴尾万葉 大阪大学人文学研究科博士後期課程

朴会員の発表はアメリカ映画における聖職者、キリスト教の神父・牧師の人物像、表現を分析するものであった。映画に登場する聖職者の姿は映画制作における自主検閲規定であるプロダクション・コードなどにおいて慎重に扱われてきたが、時代によって変遷があったことが発表者によって指摘される。映画『ポセイドン・アドベンチャー』（1972）で乗客たちを先導するスコット神父（ジーン・ハックマン）は、一般的なキリスト教観・聖職者観とは一線を画するが、アメリカに浸透するフロンティア・スピリットや強いリーダー像を体現する理想的な人物像を併せ持っていることが述べられた。

柴尾会員の発表は、ピピロッティ・リストの作品について、その空間的特徴と映像の内容（対象及びそれを捉える舐めまわすような極端なクローズアップと手持ち撮影など）を“触覚性“というキーワードで読み解くものであった。その際発表者は、リュス・イリガライのエクリチュール・フェミニンの思想を援用し、触覚性を説明する。そして今回は特に1990年代初期のシングルチャンネルビデオ作品について、分析が行われた。

両発表とも活発な質疑応答がなされ、参加者にとっても発表者にとっても有意義な議論が行われた。

第99回研究会会場

（おおはし まさる／関西支部代表、大阪芸術大学）

中部支部

齋藤 正和

<報告>
中部支部では、2023年12月17日に中部支部 第2回研究会をオンラインにて開催し、2件の研究発表と1件の招待講演が行われた。

＜第2回研究会概要＞
2023年度｜日本映像学会 中部支部｜第2回研究会
日時：2023年12月17日（日）
会場：オンライン（Zoom）

◎招待講演
「デジタルメディアの対話性を利用した映像アーカイブ／データ可視化展示」
野口 靖氏

要旨：
　歴史映像や民族誌映像アーカイブの利活用は社会的意義が高いが、現状では映像の収集に主眼が置かれ、利活用の選択肢が限られるケースもあり、貴重なアーカイブが十分にに活用されないこともある。しかし、デジタルメディアの「対話的」な特性を活かすことによって、映像アーカイブの新しい価値や社会的意義を生み出すことができるのではないだろうか。
　一方、コンピュータのプログラムによるデータ可視化の手法は、客観的な事象の把握を容易にすることによって、社会問題の可視化のための一つの強力なツールとなり得ると考えている。
本講演では、デジタルメディアの対話的な特性を活かした映像アーカイブ展示およびデータ可視化展示について、筆者の実践例を中心に紹介しながらその可能性について論じたい。

野口 靖氏｜略歴
　野口の全ての活動における関心事は、「私たちが尊厳を持って生きられる社会はどう実現できるか」であり、各プロジェクトの表現手法は、データビジュアライゼーション、ドキュメンタリー映像、体験型インスタレーションの形をとることが多い。
　武蔵野美術大学助手を経て渡米。2003年、ニューヨーク大学大学院修了。文化庁芸術家在外研修員。2004年、ポーラ美術振興財団在外研修生としてニューヨークにて活動。2009年、アルス・エレクトロニカ Honorary Mention選出。2013年、第5回恵比寿映像祭出展。2015年、文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品選出。2019年、映像のフィールドワーク展。2023年、東京工芸大学 創立100周年記念展など。現在、東京工芸大学インタラクティブメディア学科教授。
Webサイト：https://yasushinoguchi.org/

◎研究発表（２件）
「芸術資料としてのVR (I)
-VRアーカイブビューワー[プロトタイプI]を用いたサウンドインスタレーション作品記録-」
池田泰教（愛知県立芸術大学 メディア映像専攻 准教授）
要旨：
　近年、現代美術やメディアアート分野において、技術の旧式化や機材の生産終了などの社会的変遷によって作品の長期保存・再展示が困難になるケースが問題となっている。
作品の再制作までを射程とした展示記録資料の一例として、本研究では時間軸を持つ芸術作品の３次元空間情報と、それを体験する鑑賞者の視聴覚情報を仮想空間上に再構成する手法を試みる。発表では実働プロトタイプを用いたサウンドインスタレーション作品の展示記録を紹介し、その有効性を検証する。

「コロナ時期からの日本映画業界―映画の多様性・必要性を訴えたプロジェクトの発展」
RYDZEK Lucie（リゼック・ルシー）（ロレーヌ大学 CREAT研究所（元2L2S研究所））
要旨：
　2020年に始まったコロナ禍で世界中の映画業界が複数の混乱に出会った。日本では、自治体や政府による自粛要請が、劇場だけでなく製作・配給会社にも衝撃を与えた。一方、経産省と文化庁は、補正予算などで「文化芸術活動」を支援した。この際、映画という商品や装置の必要性と芸術性が問われた。この発表では、この時期に現れた映画の多様性・芸術性・必要性を訴えるプロジェクトの発展と活動、そしてその続きを考察する。

　池田会員の発表では、時間軸を持つ芸術作品のアーカイブ手法として、作品の3次元空間情報と鑑賞者の視覚・聴覚情報をVR空間上に再現する試みが紹介された。この研究の独自性は、作品単体ではなく、作品を鑑賞する環境や体験（鑑賞者の振る舞いや時間的な知覚変化を含む）も記録・提示することに重点を置いている点である。その実現のために、映像、バイノーラル音響、3Dデータなどの異種データを時間同期し、VR空間上に表示するシステムを構築したことが紹介された。

　リゼック氏の発表は、新型コロナウイルスの影響で苦境に陥った日本映画業界において、映画の多様性と必要性を訴えるために行われた様々なプロジェクトについて考察を加えたものであった。「Save the cinema」や、「Action4Cinema」など、日本映画の持続可能性のために必要なシステムや組織の活動について発表された。

　野口氏による招待講演では、デジタルメディアの「対話性」を利用した映像アーカイブやデータ可視化の実践事例が紹介された。作品制作の過程で、映像素材に対してAIを用いてタグ付けを行うことで、作業の効率化とともに、映像解釈の多様化を実現する試みが報告された。質疑応答では、言葉と映像の関係性や、現在のビッグテックが提供するAI技術をアーティストがどのようなスタンスで用いるのかなど倫理的な点にも話題が及んだ。これらの議論は、AI技術とクリエイティブな表現における重要な問題提起ともなっていた。

　オンライン開催ではあったが、大きなトラブルもなく無事に終えることができた。

<報告>
2024年3月6日（水）名古屋造形大学において、中部支部 第3回研究会が開催された。第3回研究会では、下記の通り1件の研究発表と、中部圏の11大学が参加する学生作品プレゼンテーションが行われた。

———
＜第3回研究会概要＞
日時：2024年3月6日（水）13時30分より
会場：名古屋造形大学　講義室１
開催方式：対面とオンライン（Zoom）のハイフレックス

◎研究発表◎
「映像アーカイブにとって「コミュニティ」とは何か?」
青山 太郎｜名古屋文理大学 准教授
要旨：
　本発表では「コミュニティ・アーカイブ」の定義と複数の実践事例を検討することを通じて、アーカイブ活動とコミュニティの関係性を論じつつ、映像アーカイブの社会的役割の可能性を考察する。また翻って、今日のメディア環境における「コミュニティ」および「ネイション」とは何かを再考する。

◎学生作品プレゼンテーション◎
<出品作品／発表者（発表校順）>
◉愛知県立芸術大学
《花人》4分16秒
　鈴木絢子（美術学部 デザイン工芸科 メディア映像専攻 2年）
◉静岡文化芸術大学
《きれいなわたし》2分
　柿山いづる（デザイン学部デザイン学科）
◉静岡理工科大学
《オドロキ》5分47秒
　先端アート研究室3年（情報学部情報デザイン学科 3年）
◉情報科学芸術大学院大学
《風景を採取する自転車建築》4分55秒
　門田健嗣（メディア表現研究科2年）
《Observing Variation: in Sliced Loin Hams / 差異の観測: スライスロースハム群》4分13秒
　森田明日香（メディア表現研究科2年）
◉中部大学
《音色とかまり》14分
　白井湧宇（人文学部コミュニケーション学科 4年）
◉名古屋市立大学
《鯨》7分10秒
　CHANG SHICHENG大学院　芸術工学研究科1年）
◉名古屋学芸大学
《Trace of Simulations》2分53秒
　石川真衣（大学院 メディア造形研究科 1年）
《腹鳴恐怖症》4分18秒
　小沼亜未（大学院 メディア造形研究科 2年）
◉名古屋芸術大学
《IRODORU》1分23秒
　尾上 優衣（芸術学部 イラストレーションコース 4年）
《Starry night party》1分3秒
　山田 音羽（芸術学部 メディアデザインコース 4年）
◉名古屋造形大学
《救世サービス》16分14秒
　澤村 要（造形学部 情報表現領域 4年）
《インターフェースデザインゼミ 2023年度インタラクティブ作品》1分33秒
　荒川 楓（造形学部 情報表現領域 4年）
◉名古屋文理大学
《9月1日、それぞれの思い》19分47秒
　佐藤稜真（情報メディア学部情報メディア学科 4 年）
◉愛知淑徳大学
《THE BUDDY －裏切りの弾丸－》9分23秒
　曲直瀬陽紀（文化創造研究科 文化創造専攻 メディアプロデュース専修）

　青山会員の発表では、「コミュニティ・アーカイブ」の定義と実践例を中心に幅広い話題が提供された。発表の中では、「コミュニティ」にとってなぜアーカイブが重要なのかという議論が徹底されていないことなどが指摘された。
　また、近年日本各地で展開されている8mmフィルムの発掘プロジェクトをコミュニティ・アーカイブとして位置づけ、その「語り」の場が持つ創造的な可能性とともに危険性も示された。最後に、アーカイブにおけるファウンドフッテージという手法のポテンシャルと関連して、近年注目を集めているセルゲイ・ロズニツァの仕事が紹介された。

　学生作品プレゼンテーションは、例年通り、研究会開催の約10日前から、作品（動画）をまとめた特設サイトをオンライン公開し、事前に作品を視聴できるようにした。作品は、実験的な映像作品、アニメーション、ドキュメンタリー作品、短編ドラマ作品、展示プロジェクトをまとめたものなど、多岐にわたり、表現手法も多様だった。発表では、学生が自作についてプレゼンテーションを行い、質疑応答の時間を設けた。会員や他校の学生から活発な質問や感想が寄せられ、学生にとっても、学生の制作指導を行う教員にとっても有意義な場となった。

今回の研究会は、対面とZoomを併用したハイフレックス形式で実施された。担当校の負担は大きかったものの、遠方の会員の参加もあり、従来の対面開催よりも多くの参加者を得ることができた。
研究会の前に行われた幹事会では、来年度の研究会の担当校やスケジュールが確認された。

（さいとう まさかず／中部支部代表、名古屋学芸大学）

西部支部

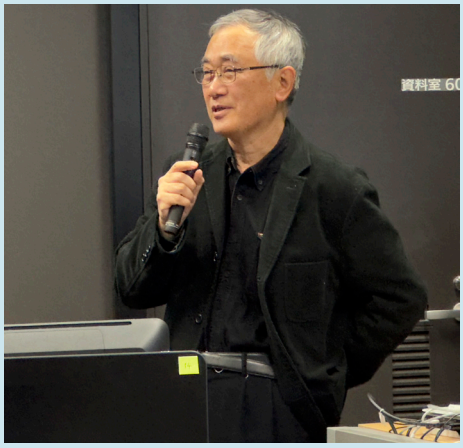
黒岩 俊哉

西部支部では、2024年3月13日(水)、九州産業大学芸術学部17号館6階デジタルラボ601にて、研究例会と2023年度支部総会を、同日に開催した。研究例会では西部支部の会員から2件の研究発表があった。

(1) オキーフ・グレッグ（福岡女学院大学国際キャリア学科准教授）
『Visual Sociology: Transforming the classroom through Project Based Learning』
(2)八尋義幸（映画研究）
『アジアフォーカス・福岡国際映画祭の達成と残したもの』

(1)のグレッグ会員からは、映像教育の実例として、大学の授業におけるドキュメンタリー映像の制作について研究発表がなされた。この授業は、プロジェクトベースラーニング(PBL)の枠組みの中で視覚社会学を応用したことが特長で、学生によって実際に制作されたドキュメンタリー作品が上映された。氏が考案した年間の授業計画は、視覚社会学の複数の研究を基盤にしており、これらによって学生個人およびグループワークにおける計画力やマネジメント能力、コミュニケーション能力が向上したことが報告された。一方で問題点や改善点についても触れられ、会員間で意見交換が行われた。

(2)の八尋会員からは、1991年から2020年まで30年間にわたって福岡市で開催された映画祭『アジアフォーカス・福岡国際映画祭』について、詳細な記録が提示された。そこには当映画祭の特徴として、福岡市という自治体が主催であり事務局が福岡市の職員で継続されてきたこと、プロデューサーではなくディレクターを置いていたこと、アジアを中心に多くの国から多数の映画および監督などの制作者を発掘したこと、上映後に監督や俳優、プロデューサーが登壇し、観客との質疑応答の時間を30分～40分とっていたこと、他の市民映画祭、ワークショップや映画制作プロジェクトへの援助を行っていたこと、上映されたフィルムは福岡市総合図書館で全体の52%が収蔵されていること、映画祭によって得られた英語字幕フィルムが現在では貴重なものとなっており、他の国内外の映画祭への貸出を行っていることなど、30年におよぶ映画祭の実績と特徴がまとめられ、その功績や意味が検証された。



研究例会後には、年次総会として2023年度西部支部総会を執り行った。(議題1)2023年度会計報告、(議題2)2023年度活動報告については、事務局の原案通り了承された。(議題3)2024年度活動計画については、いくつかの活動方針および案が検討されたが、時期や状況を踏まえながら支部の研究活動の活性化を図っていくこととなった。(議題5)日本映像学会第50回全国大会(九州産業大学)については、同時点での現状が大会実行委員長より報告され、6月の開催に向けて支部の協力が請われた。

（くろいわとしや／西部支部、九州産業大学）

我々は日中映画交流の新たな風を吹かせられるのか？

～日中映画国際シンポジウム「風雨同舟（ふうう どうしゅう）―日中映画交流の過去、現在、そして未来に向かって」を振り返る～

戴 周杰

2023年、静岡県が「東アジア文化都市[1]」として選定されたことを受けて、1年間を通して県内各地で日本・中国・韓国の3カ国の文化・芸術分野の国際交流事業が集中的に行われました。また、2022年は、「日中国交正常化50周年」でもありました。この間、日中両国には政治や経済の領域で緊張感が生じることも時にはありましたが、文化・芸術の分野では様々な形で絶えず交流が続きました。しかし近年、新型コロナウイルス感染症の流行により人々の移動が制限され、相互の理解が薄らぎつつあります。だからこそ今、日中両国の交流を改めて繋げる必要があると考えます。

様々な国際関係や文化政策の背景の下、静岡県浜松市が生んだ映画監督・木下惠介（1912～1998）の生前の中国との絆から着想し、筆者の職場である県内唯一の「映画・映像」に特化した公立文化施設「木下惠介記念館」にて、木下惠介監督の生没月に当たる2023年12月3日（日）に、日中両国の映画研究者や映画作家、映画祭関係者等のゲストを迎え、多角的な視点で日中映画国際シンポジウム「風雨同舟―日中映画交流の過去、現在、そして未来に向かって」を開催しました。

日本と中国が同じ漢字文化圏に属するということもあり、中国由来の故事成語「風雨同舟[2]」を全体のメインテーマに決めました。浜松が位置する静岡県西部地区はかつての令制国の「遠江国」の一円にあたり、今でも「遠州地方」と呼ばれています。浜松の気候は比較的温暖ですが、冬は「遠州のからっ風」と呼ばれる北西の強い季節風がこの街を吹き渡ります。浜松を出航した日中映画交流の舟が、その「遠州のからっ風」を味方につけ、前に進んでいくイメージも浮かびました。

会場の様子

本シンポジウムは三部構成とし、第一部は、上映会とアフタートークを行いました。広島生まれ北京育ちの映画作家・柴波（さい なみ）氏のデビュー作『異郷人』（2019）の上映後、柴監督に加えて、神奈川大学外国語学部准教授の秋山珠子氏をコメンテーターに迎え、筆者が聞き手を務めてアフタートークを開催しました。第二部では、東京大学大学院総合文化研究科教授の韓燕麗（かん えんれい）氏、神戸学院大学人文学部准教授の上田学氏、上海国際映画祭プログラマーで映画ジャーナリストの徐昊辰（じょ こうしん）氏ら日中両国の映画研究者や関係者を迎えて、テーマ講演を開催しました。第三部では、第二部の3人の講演者に、第一部に登壇した秋山珠子氏を加えて、筆者がモデレーターを務めてパネルディスカッションを開催しました。

本シンポジウムには、一般市民をはじめ、東北から関西までの映画研究者や映画祭・映像文化施設関係者、映画プロダクション・テレビ局関係者、日中両国の交流に携わる関係者、日本映像学会各支部の会員の方々、大学生や留学生など、定員を超えた51名の参加者に加え、ゲストや関係者、マスコミ関係者など総勢65名が来場しました。

企画の段階では、「日中映画交流」という漠然としたテーマを設定しましたが、登壇者やプログラムの選定を進める中で、複数回の議論を重ね、最終的に表題に決まりました。日本有数の「ブラジリアンタウン」として知られる浜松には、87カ国の外国人が暮らしています。「多文化共生都市」と提唱されている浜松で、日本と中国の間で揺れるアイデンティティーを探る柴監督の『異郷人』を上映する意義は大きいと判断しました。『異郷人』の浜松初上映を決定したことから、長年に渡って中国のインディペンデント映画の翻訳と研究を重ねられてきた神奈川大学の秋山珠子氏を迎えて、柴監督との対談の場を設けることに至りました。

第一部のアフタートークでは、柴監督が自らの生い立ちから『異郷人』という作品を生んだ製作の背景を紹介しました。一方、本作の編集も担当した筆者からは、合計25時間程の膨大な撮影素材を最終的に45分の完成版に編集する困難さや、柴監督の様々な思いをどうしたら最大限に表せるのかを考えたこと、また監督と議論を重ねながら仕上げたエピソード等を語りました。コメンテーターの秋山氏は『異郷人』での日中交接の繊細な描写を受け、「潮境」のメタファーを紹介しました。遠州灘をはじめ、性質を異にする水塊が衝突する潮境では、それらが融合するのではなく、渦や乱流が生じることにより好漁場を形成するように、日中のインディペンデント映画も、異なる流れが交錯することで、単なる折衷を超えた多くの新たな成果が生まれてきたことを、小川紳介監督とアジア映画人との出会いを例に論じました。

『異郷人』（監督：柴波）スチール写真

第二部の講演は、東京大学の韓燕麗氏による講演「異郷に生きて――移動と故郷喪失の近代」を「現在」、神戸学院大学の上田学氏による講演「満州映画協会と日中の映画人」を「過去」、上海国際映画祭の徐昊辰氏による講演「国際映画祭の現場から見る日中映画交流の最新事情」を「未来」とし、その3つの視点で構成することにより、シンポジウムのサブタイトル「日中映画交流の過去、現在、そして未来に向かって」を可視化できると考えました。

中国系移民が異郷の地で作った中国語映画を研究されている韓氏は、「ディアスポラ」という概念を引用し、柴監督の『異郷人』を切り口に、「原風景の不在による喪失感」と「異国体験による喪失感」の 2 種の喪失感を提示した上で、中国朝鮮族の映画監督・張律（ちゃん りゅる）や台湾映画監督・侯孝賢（ほう しゃおしぇん）の作品を事例に挙げ、移動の時代においては「異郷人」の定義がより多様的かつ曖昧になってくると論じました。次に、

1 「東アジア文化都市」とは、日中韓文化大臣会合での合意に基づき、日本・中国・韓国の3か国において、文化芸術による発展を目指す都市を毎年原則1都市選定し、文化交流、文化芸術イベント等を実施する国家的プロジェクトです。これにより、アジア域内の相互理解・連帯感の形成を促進するとともに、東アジアの多様な文化の国際発信力の強化を図ることを目指します。

2 「風雨同舟（ふううどうしゅう）」とは、同じ舟に乗って激しい嵐を乗り越えるという意味です。日本で使われている故事成語「呉越同舟」と似たような意味を持ちますが、中国ではよりポジティブな意味で使うことが多いです。

満州映画研究も専門とする上田氏は、満州映画協会の歴史を振り返って、設立から東北電影制片廠への改組の流れを説明した上で、雑誌『満洲映画』の調査にもとづき、満映演員養成所出身のスター女優・張敏（ちょう みん）らの事例を提示し、満州国時代の日中映画交流の状況について語りました。続いて、中国で最も歴史の長い国際映画祭「上海国際映画祭」の日本映画部門でプログラマーを務めている徐氏は、上海国際映画祭は、日本映画を中国の映画ファンに紹介する重要な場でありながら、その文化政策の制約によってバランスを取るのが難しい現状についてを語りました。その上で、上海国際映画祭や東京国際映画祭における山田洋次監督のエピソードも併せて紹介しました。

第三部のパネルディスカッションは、中心テーマの「風雨同舟」に因んで「日中映画交流の課題と未来―我々は新たな風を吹かせられるのか?」と題し、筆者から、文化的な側面と地理的な側面から「東アジア」をどう定義するのかを最初の問題提起としました。その問題提起から徐氏は、近年日中や日韓など東アジア圏の国際共同製作映画の動向が高まる中、ヨーロッパ圏の映画では多国の共同製作が普遍的になり、国際共同製作映画という定義自体が存在しないと指摘しました。次に韓氏は自らの研究テーマを踏まえた上で、東アジア圏の共同映画製作では、国籍といった壁を打破する考え方が必要とされると語りました。続いて上田氏は満州映画の資料を日本本土だけではすべて収集できないという現状を語り、満州映画研究における日中交流の喫緊性を述べました。さらに、観客席にいる柴監督から、中国大陸における満州映画研究は国の政策によって規制されているため、中国の国立映画アーカイブ「中国電影資料館」に所蔵されている満州映画の関連資料は一般の方が閲覧することが難しいとのコメントがありました。質疑応答の時間では、市民映画団体の方や映画ファンの方、日中のルーツを有する方などから、多数の質問や感想が寄せられ、日中両国を代表する登壇者と共に、日中映画交流の未来と課題について考える濃密な時間になりました。

本シンポジウムの実施に伴い、浜松市内の公立大学法人静岡文化芸術大学（SUAC）との連携を試みました。SUACは2000年に開学した比較的新しい大学ですが、日本初の文化政策学部を開設し、文化政策とアートマネジメントの教育や研究における拠点校の役割を果たしているユニークな県立大学です。2013年、SUAC図書館・情報センター[3]は「静活株式会社」から合計約5,000冊の映画関係資料の寄贈を受け、映画資料コレクションが充実するようになりました。そのような背景から、SUAC図書館・情報センター とのコラボレーション展示を新たに企画しました。シンポジウムの開催前後に、シンポジウム登壇者らの著書と中国・ 中華圏の映画資料をSUAC図書館・ 情報センターより貸し出していただき、木下惠介記念館で期間限定展示したことで、シンポジウムの内容がより深く理解されたと思います。さらにSUAC図書館・情報センターでも日中を含めた東アジア地域の映画チラシと映画関連書籍の企画展示を同時開催し、一般市民から大学生らの若年層まで、映画の魅力に触れてもらう機会を創出しました。浜松市内の、映画資料を有する2つの公立施設の連携が本事業の開催で初めて実現できました。

また、愛知大学現代中国学会の機関誌『中国21 vol.59中国とハリウッド、映画祭』（2023年12月号）では、シンポジウムにも参加された愛知大学現代中国学部准教授の藤森猛氏によるシンポジウムの全体レビュー[4]を掲載していただきました。日本で唯一「現代中国」の名を冠する愛知大学現代中国学部は、現代中国をめぐる諸分野の教育研究拠点で、戦前の上海に存在した「東亜同文書院大学」を源流に持ちます。現代中国学部教員・学生などを主体として構成される愛知大学現代中国学会が年2回発行する『中国21』では、22年ぶりに「中国の映画」が特集に取り上げられました。幸運にも、同誌に掲載されたことにより、静岡県内だけでなく、愛知県の教育機関との連携も今後実現するきっかけとなりました。

木下惠介記念館×静岡文化芸術大学図書館・情報センター
「日中映画国際シンポジウム」コラボレーション企画展示の会場風景

木下惠介記念館が所在する浜松市は、ヤマハやスズキなど世界的な大企業が立地する産業都市として知られています。2014年にユネスコ創造都市ネットワークの音楽分野に加盟して以来、産業と文化の両輪をバランスよく走らせながら、文化政策の先進地として成長しました。少子高齢化、市街地空洞化など、様々な課題を抱える地方都市において、映画をはじめとした文化芸術による地域活性化や町おこしの役割が重要視されるようになった今こそ、地域の文化施設において、文化行政、教育機関、地元企業といった「産学官連携」の可能性を探る好機になると考えます。

木下惠介記念館は、地方都市に立地する小規模な公立映画資料館で、館自体の年間事業予算が厳しく制約されざるを得ない状況の中で、東アジア文化都市2023静岡県「地域連携プログラム」の助成をきっかけに、浜松市内の映画関係団体・組織・施設による連携・協力・サポートのもとで、初の試みとなる「日中映画国際シンポジウム」が実現できました。国際交流や文化芸術領域で東京への一極集中が加速化する今、東京と大阪のほぼ真ん中に位置し、人、物、情報が行き来する交通の要衝である浜松が、そのアクセスの利便性を文化に結びつけることによって、地方発の国際交流事業をどういう形で展開させるべきなのかを問い直す機会となりました。

映画監督の記念施設である「木下惠介記念館」の最も大きな特徴は、昭和期の日本を代表する木下惠介監督ゆかりの資料をはじめとするコンテンツを所有していることです。しかしながら、その強みは時には弱みにもなります。「木下惠介」というコンテンツの魅力や価値が時代の流れによって失われつつある今、「木下惠介」というコンテンツしかないという差し迫った課題または制限が明確に見えてきました。

木下惠介監督は戦前から戦後にわたって活躍した映画監督であり、中国との絆が強かったことや、第二次世界大戦時下においての中国・武漢への従軍経験から木下映画においての重要なテーマ「反戦と平和」が確立され、戦後、日本と中国の友好交流にも大きく貢献しました。また、生涯49本の映画を製作した木下惠介が映画監督人生の最後に作ろうとしていた作品は、『戦場の固き約束』という日中合作映画でした。そういった日中映画交流的な要素を備えていることで、木下惠介記念館には日中映画交流事業を実施する基盤があるはずだと考え、2022年12月4日（日）に大阪大学准教授で日中映画交流史を専門とする劉文兵（りゅう ぶんぺい）氏を招いて、講演会「木下惠介と中国の絆」を開催しました。その第一歩を踏み出した実績を

3　静岡文化芸術大学（SUAC）図書館・情報センターは2013年3月、静岡市にある「静活株式会社」から映画雑誌約3,500冊、映画パンフレット約1,400冊、脚本277冊、図書約50冊、合計約5,000冊の映画関係資料の寄贈を受けました。それにより、SUAC図書館・情報センターは、公立大学の図書館としては珍しく映画関係資料のコレクションが充実し、映画資料館としての特徴を持つようになりました。

4　藤森猛. 木下惠介、中国、そして、映画祭――木下惠介記念館担当キュレーター 戴周杰氏に聞く（インタビュアー 藤森猛＋川村亜樹）.中国21. 2023, 59, p38.

開花させたく願っていた矢先、偶然にも静岡県が東アジア文化都市に選定されたことから、東アジア文化交流事業を軸とする助成を受け、「日中映画国際シンポジウム」を開催することができました。本シンポジウムの開催が特定の映画監督の記念館という制約を打破し、更には地方発の国際映画交流の輪がより広がっていくことを願います。

木下恵介記念館（浜松市指定有形文化財「旧浜松銀行協会」/1930年建設）

最後になりますが、この度は記念すべき「日本映像学会報 第200号」という素敵な場を借りて、「日中映画国際シンポジウム」に参加いただいた会員の方はもちろん、来場されなかった会員の方にも、本シンポジウムの開催を報告することができ、大変嬉しく思います。また、本シンポジウムに登壇いただいたゲストの皆様をはじめ、シンポジウムの準備にあたり、様々な協力をいただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げたいと思います。

（たい しゅうき／木下恵介記念館）

編集後記

総務委員会　安部 裕

会報 200 号をお届けしました。「200 号」という数字に、この学会の歴史の長さと重みを感じます。200 号を記念して何か特別な企画を行った方が良いのでは、と内心思いはしましたが通常通りの発行となりました。300 号、400 号と続けていける学会であることを願いつつ、微力ながらお手伝いしていければ、と考えております。

冒頭の VIEW 展望欄は、アジア映画研究会にお願いし、東京大学大学院総合文化研究科の韓燕麗教授に「アジア映画の未来を語るプラットフォームの構築」と題して執筆していただきました。ご協力ありがとうございました。

6 月 1 日・2 日の 2 日間、第 50 回の全国大会が九州産業大学で開催されます。基調講演や研究発表 / 作品発表の詳細も決まり、準備が進められているようです。2 年前までのコロナ禍は何だったのか、と思うほど 2019 年以前の大会の姿に戻るようで喜ばしい限りです。

私が編集を担当しますのは今号が最後となります。2 年弱という短い期間ではありましたが、多くの方々のご協力をいただき無事役目を果たすことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

（あべ ゆたか／総務委員会、日本大学）